

2022 年 10 月

食料安全保障月報

(第 16 号)



令和 4 年 10 月 31 日

農林水産省

食料安全保障月報について

1 意義

我が国は食料の大半を海外に依存していることから、主食や飼料原料となる主要穀物(コメ、小麦、とうもろこし)及び大豆を中心に、その安定供給に向けて、世界の需給や価格動向を把握し、情報提供する目的で作成しています。

2 対象者

本月報は、2021年6月まで発行していた海外食料需給レポートに食料安全保障の観点から注目している事項を適宜追加する形で、国民のみなさま、特に、原料の大半を海外に依存する食品加工業者及び飼料製造業者等の方々に対し、安定的に原料調達を行う上での判断材料を提供する観点で作成しています。

3 重点記載事項

我が国が主に輸入している国や代替供給が可能な国、それに加えて我が国と輸入が競合する国に関し、国際相場や需給に影響を与える情報（生育状況や国内需要、貿易動向、価格、関連政策等）について重点的に記載しています。

4 公表頻度

月1回、月末を目処に公表します。

2022 年 10 月食料安全保障月報（第 16 号）

目 次

概要編

I	2022 年 10 月の主な動き	1
II	2022 年 10 月の穀物等の国際価格の動向	4
III	2022/23 年度の穀物需給（予測）のポイント	4
IV	2022/23 年度の油糧種子需給（予測）のポイント	4
V	今月の注目情報 「米国とロシアの穀物等の生産・輸出動向」	5

（資料）

1	穀物等の国際価格の動向	8
2	穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移	9
3	穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、品目別）	10
4	加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の状況	12
5	食品小売価格の動向	16
6	海外の畜産物の需給動向（ALIC 提供）	17
7	FAO 食料価格指数	19

品目別需給編

I 穀物

1	小麦	1
	＜米国＞ 生産量は前月予測に比べ 3.6 百万トン下方修正の 44.9 百万トン	
	＜カナダ＞ 生産量は回復し、前年度比 55.6%増、過去 5 年平均比 14.3%増	
	＜豪州＞ 生産量は史上 2 番目の 33.0 百万トン、輸出先国は中国が増加	
	＜EU27+英国＞ 小麦の飼料用需要がとうもろこし等の代替で上方修正	
	＜中国＞ 8 月の小麦輸入先国のシェアは豪州が 86.1%	
	＜ロシア＞ 生産量は史上最高の 91.0 百万トン、期末在庫量も高水準	
	＜ウクライナ＞ 生産量は過去 5 年平均を 26.6%下回る 20.5 百万トン	
2	とうもろこし	9
	＜米国＞ 生産量は収穫面積・単収減少により減産、輸出減の見通し	
	＜ブラジル＞ 生産量は史上最高、輸出増の見通し	
	＜アルゼンチン＞ 生産量は史上最高、輸出増の見通し（輸出税継続）	
	＜中国＞ 生産量、消費量ともに史上最高、輸入量減少の見通し	
	＜ウクライナ＞ 輸出再開で輸出量は上方修正も、前年度より 4 割減	
3	コメ	15
	＜米国＞ 生産量減少により価格が高騰	
	＜インド＞ 生産量、輸出量ともに下方修正	
	＜中国＞ 中国の飼料用米需要が下方修正	

<タイ> 2022/23 年度の生産量・輸出量は増加見通し
<ベトナム> インドの輸出規制による代替需要増で輸出価格が上昇

II 油糧種子

大豆・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2 1

<米国> 単収の下方修正により、生産量は減産、輸出減の見通し

<ブラジル> 生産量は史上最高、輸出量も史上最高の見通し

<アルゼンチン> 生産量は史上最高、輸出量前年度比 2.5 倍（輸出税継続）

<中国> 増産見通し、消費量・輸入量も増加見通し

<カナダ> 収穫面積は減少も、単収の増加により増産、輸出量も増加見通し

（参考 1）本レポートに使用されている各国の穀物年度について（2022/23 年度）・・・ 2 7

（参考 2）単位換算表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2 7

特別分析トピック

「我が国と世界の飼料をめぐる動向」

【利用上の注意】

表紙写真：米国イリノイ州のとうもろこしの収穫（9 月 21 日撮影）

天候に恵まれ収穫作業は順調に進展した。

(概要編)

I 2022 年 10 月の主な動き

主要穀物等の需給・相場等について

主要穀物等の 2022/23 年度の作況については、北半球の冬小麦は収穫が終了し、その他の作物は成熟期から収穫期を迎え、南米では今後作付けが開始される。

品目別にみると、10 月の米国農務省（USDA）の需給報告では、小麦については、世界の生産量が前年度より増加する見通し。ロシアのウクライナ侵攻に関連し、3 月に過去最高を更新した国際相場も侵攻前の水準まで戻しているものの、今後も注視が必要。

とうもろこしについては、世界の生産量が米国や欧州の乾燥等の影響により前年度より減少する見通し。一方、大豆については、前年度乾燥で減産となった南米を中心に世界で増産となる見通し。いずれの品目も期末在庫は依然としてタイトな状況であり、引き続き注視する必要。

FAO（国連食糧農業機関）が公表している食料価格指数（最新値：9 月）については、植物油（163→153）が下落した影響などにより、8 月より下落（138→136）しているものの、引き続き高い水準を維持（参考：前年 9 月の値は 129）。

海上運賃については、バルチック海運指数（穀物輸送等に使用される外航ばら積み船の運賃指数）は、直近 5 年間の最高値を記録した 2021 年 10 月の水準と比較して、4 割程度の水準で推移。

早期注意段階の継続について

現状において、我が国の食料の安定供給に懸念は生じていないものの、上記の状況を踏まえ、2021 年 7 月から適用を開始した、緊急事態食料安全保障指針に基づく「早期注意段階」については、10 月も引き続き適用。

【参考】早期注意段階について（農林水産省 HP）

<https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/soukichuui.html>



ウクライナの生産・輸出動向

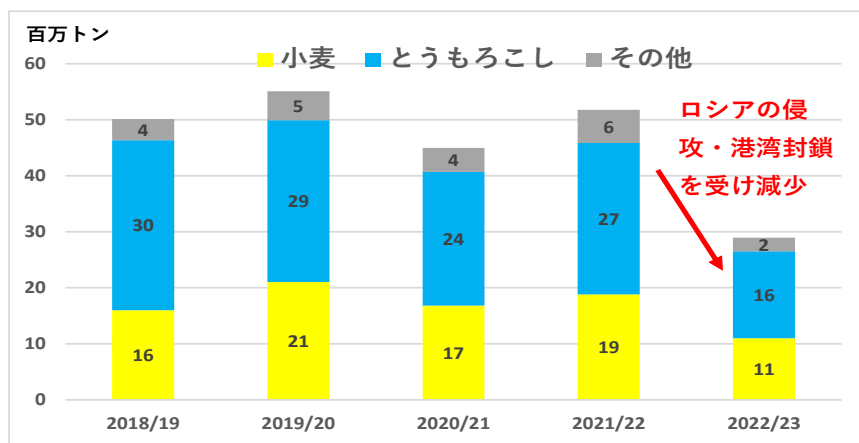
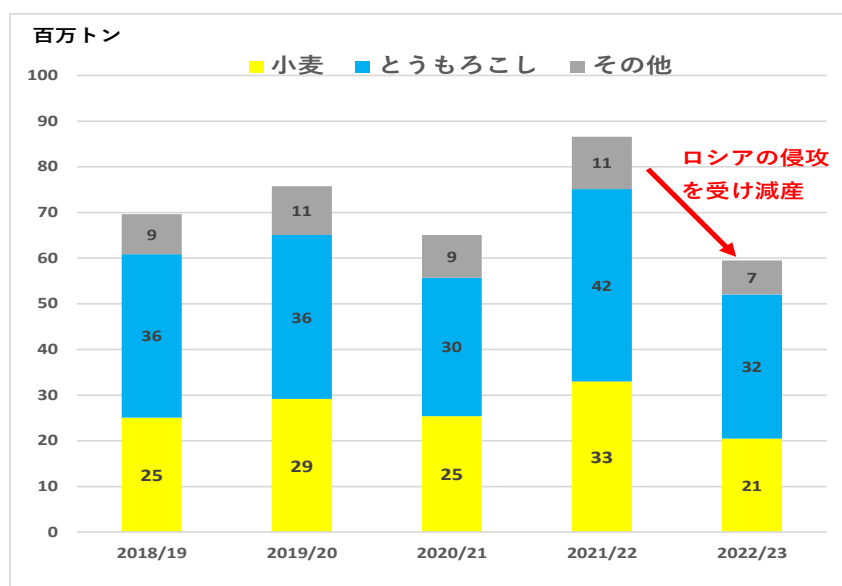
ウクライナ農業政策食料省の 10 月 21 日報告によると、冬小麦は収穫が終了し、1,920 万トン収穫された。とうもろこし等の夏作物も収穫が開始され、計画の 12% に当たる 270 万トンが収穫された。

7 月 22 日の国連、ウクライナ、ロシア、トルコの 4 者によるウクライナ産穀物の黒海経由での輸出再開に関する合意を受け、8 月以降、オデーサ港等 3 港からの輸出が再開された。9 月 30 日までに 559 万トンの穀物・油糧種子等が輸出された。

米国農務省（USDA）の 10 月見通しによれば、ウクライナの 2022/23 年度の小麦生産量は、前月見通しから変更はなく 2,050 万トンの見通し。ロシアによる侵攻の影響を受け、対前年度比 38% 減となっている。輸出量は前月見通しから変更はなく、前年度対比 42% 減の 1,100 万トンの見通し。

一方、とうもろこしの生産量については、前月見通しから変更なく、対前年度比 25% 減の 3,150 万トン。輸出量は上方修正されたが、前年度対比 43% 減の 1,550 万トンの見通し。

(参考) ウクライナの小麦ととうもろこしの生産量(上)、輸出量(下)の推移



出典：米国農務省 「PS&D」 (2022. 10)

1 ブラジルの 2022/23 年度の大豆、とうもろこしは大幅増産見通し

ブラジルの 2022/23 年度の夏作物の作付けが開始された。ブラジル食料供給公社の 10 月見通しでは、とうもろこしなどの穀物と大豆などの油糧種子を合わせ生産量は史上最高の 3 億 1,240 万トンの見通し。そのうち、9 割近くが大豆ととうもろこしが占めている。

作付け期を迎えた大豆は、乾燥の影響を受け減産となった前年度から 21.3%増の 1 億 5,240 万トン。とうもろこしは、現在作付け中の夏作と、大豆の収穫後に作付けされる冬作を合わせ、前年度比 12.5%増の 1 億 2,690 万トン。いずれも史上最高を更新する見通し。

他方、現在、ラニーニャ現象が継続しており、生育期の天候に注視が必要である。

2 インドの高温・乾燥、パキスタンの洪水で穀物生産量は減少の見通し

USDA によれば、インドの小麦生産量は、収穫期の熱波の影響で、対前年度比 6 % 減の 1 億 300 万トン、コメ生産量は、生育期の降雨不足で 3 か月連続で下方修正され、対前年度比 5 % 減の 1 億 2,400 万トンの見通し。小麦、コメとも輸出規制が継続している。

一方、パキスタンは、南部のシンド州を中心に、洪水による水が引かない地域があり、コメ生産量は対前年度比 19%減の 740 万トンの見通し。11 月以降の 2023/24 年度の小麦の作付けについても懸念されている。

3 EU の穀物生産は干ばつの影響で、特にとうもろこしが大きく減少する見通し

EU の穀物生産については、500 年に 1 度ともいわれる 7 月から 8 月の干ばつによる影響を受けて減産となった。EU の見通し(9 月 30 日)によれば、穀物全体では前年度比で 8 % 減の 2 億 7,090 万トンの見通し。特に、受粉期のとうもろこしが影響を受け、生産量は前年度比で 24%減の 5,550 万トンの見通し。

一方、小麦については、7 月までにおおむね収穫が終了したことから大きな影響は免れ、生産量は前年度比で 2 % 減の 1 億 3,440 万トンの見通し。

とうもろこしの減産に伴い、小麦や大麦の飼料向けとしての代替供給に加え、ブラジルや輸出が再開されたウクライナからの輸入が想定される。

なお、2023/24 年度の小麦は 9 月以降の降雨に恵まれ、順調に作付け、生育が進展しているとみられる。

II 2022 年 10 月の穀物等の国際価格の動向

小麦は、9 月末、330 ドル/トン台後半で推移。10 月に入り、ドル高等から 320 ドル/トン台前半に値を下げたものの、ウクライナ情勢の長期化によるウクライナ産の黒海経由での輸出の混乱懸念から 340 ドル/トン台半ばに値を上げた。その後、豊作によるロシアの輸出枠撤廃の可能性やウクライナ産の黒海経由での輸出維持に向けた協議の見通し等から値を下げ、10 月下旬現在、310 ドル/トン台前半で推移。

とうもろこしは、9 月末、260 ドル/トン台後半で推移。10 月中旬には。ウクライナ情勢の長期化によるウクライナ産の黒海経由での輸出の混乱懸念から、一時 270 ドル/トン台半ばに値を上げた。その後、米国の期末在庫は低水準であるものの、収穫の進展、ミシシッピ川の水位低下による米国産の輸出競争力低下、世界的な景気減速懸念等から、ほぼ横ばいで推移し、10 月下旬現在、260 ドル/トン台後半で推移。

コメは、9 月末、450 ドル/トン前後で推移。10 月に入り、バーツ高により、一時 450 ドル/トン台前半まで値を上げたものの、その後のバーツ安や新穀の供給への期待感から値を下げ、10 月下旬現在、440 ドル/トン台前半で推移。

大豆は、9 月末、500 ドル/トン前後で推移。10 月中旬には USDA の 10 月需給報告で米国の生産量が市場予想に反して下方修正されたこと等から、一時 510 ドル/トン台前半まで値を上げた。その後、米国の期末在庫は低水準であるものの、収穫の進展、ミシシッピ川の水位低下による米国産の輸出競争力低下、世界的な景気減速懸念等から値が小幅に上下し、10 月下旬現在、510 ドル/トン前後で推移。

(注) 小麦、とうもろこし、大豆はシカゴ相場（期近物）、米はタイ国家貿易委員会価格

III 2022/23 年度の穀物需給（予測）のポイント

世界の穀物全体の生産量は、前月予測から 900 万トン下方修正され 27.5 億トン。消費量は、前月予測から 780 万トン下方修正され 27.8 億トンとなり、生産量が消費量を下回る見込み。

期末在庫率は前年度を下回り 27.6%となる見込み（資料 2 参照）。

生産量は、前月予測から、小麦、とうもろこし、コメで下方修正され、穀物全体で下方修正され、27.5 億トンの見込み。

消費量は、前月予測から、小麦、とうもろこし、コメで下方修正され、穀物全体で下方修正され、27.8 億トンの見込み。

貿易量は、前月予測から、小麦、とうもろこし、コメで下方修正され、4.9 億トンの見込み。

期末在庫量は、7.7 億トンと前月予測から下方修正、期末在庫率は、前月予測から下方修正された。

(注：数値は 10 月の USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」による)

IV 2022/23 年度の油糧種子需給(予測)のポイント

油糧種子全体の生産量は前年度を上回り 6.5 億トン。消費量は前年度を上回り 6.3 億トンとなり、生産量が消費量を上回る見込み。

期末在庫率は前年度を上回り、19.0%となる見込み。

(注：数値は 10 月の USDA 「Oilseeds : World Markets and Trade」による)

V 今月の注目情報：米国とロシアの穀物等の生産・輸出動向

本年は世界各国で干ばつや洪水などが発生しており、米国では7月から9月にかけての高温乾燥により、とうもろこしや大豆生産が影響を受けた。現在収穫が進展しているが、前年度より減産見通しとなっている。小麦については、前年度干ばつであった春小麦の生産量の回復により前年度よりわずかに増加したものの、3品目とも期末在庫率は低水準である。

一方、ロシアについては、米国と対照的に小麦など穀物について史上最高の豊作が見込まれ、期末在庫は積み上がっている。両国の穀物の生産・輸出動向についてまとめた。

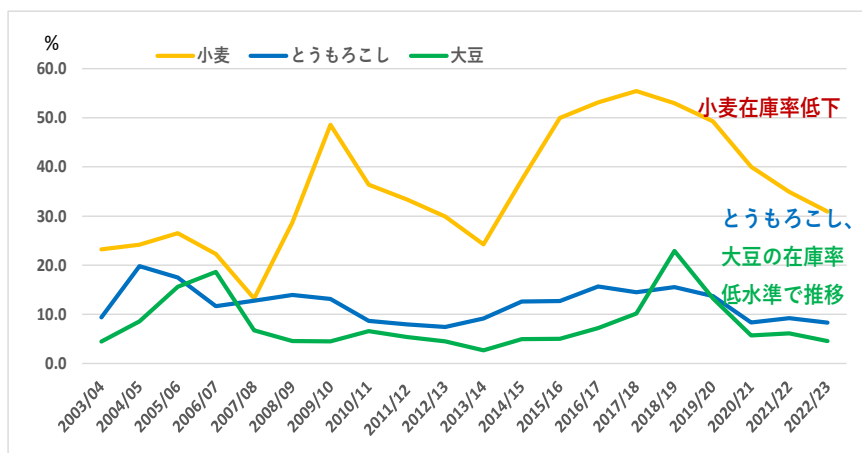
注 文中の「2022/23 年度」等は穀物年度で、米国のとうもろこしは 2022 年9月から 2023 年8月。国や作物によって異なる(品目別需給編 P. 27 参照)。

1 米国

図1 米国の小麦、とうもろこし、大豆の期末在庫率の推移

(1) 小麦の生産・輸出見通し

2022/23 年度の冬小麦、春小麦の収穫は終了した。USDA の10月見通しによれば、冬小麦、春小麦、デュラム小麦とも前月見通しから引き下げられたことから、全体で362万トン下方修正され、4,490万トンの見通し。前年度と比較して、冬小麦は乾燥により減産も、春小麦が



出典：米国農務省 「PS&D」(2022.10)

前年度の干ばつの影響から回復したことから、合計では、前年度をわずかに上回るものの、過去20年で2番目の低水準となった。

生産量の下方修正に伴い、相対的に価格が高い米国の輸出見通しも下方修正され、2,109万トンと前年度を下回る見通し。

期末在庫量は、1,568万トンと過去15年で最低の水準。期末在庫率も30.9%と大きく低下する見通しであり、過去10年間で見て2013/14年度以来の低水準となっている。

(2) とうもろこしの生産・輸出見通し

USDA の「Crop Progress」(2022.10.17)によれば、10月16日時点のとうもろこしの収穫進捗率は45%と過去5年平均(40%)より進展している。

USDA の10月見通しによれば、前月見通しから124万トン下方修正され、3億5,295万トンの見通し。肥料価格の高騰による施肥量の少ない大豆などへの作付けのシフトによる作付面積減に加え、夏季のコーンベルト西部の高温乾燥による単収の低下などから、前年度より8%減の見通し。

減産に伴い、輸出見通しも下方修正され、5,461万トンと2年連続で減少の見通し。

期末在庫量は、2,977万トンと前年度より低下、期末在庫率は8.3%と過去10年間で最低、とうもろこしのシカゴ相場が過去最高値を付けた2012/13年度以来の低水準となる見通し。

(3) 大豆の生産・輸出見通し

USDA の「Crop Progress」(2022.10.17)によれば、10月16日時点の大豆の収穫進捗率は

は 63%と過去 5 年平均(52%)より進展している。

USDA の 10 月見通しによれば、前月見通しから 178 万トン下方修正され、1 億 1,738 万トンの見通し。とうもろこしからの作付けのシフトにより作付面積は増加したが、夏季の高温乾燥による単収の低下などから、前年度より 3 %減の見通し。

減産に伴い、輸出見通しも下方修正され、5,566 万トンと 2 年連続で減少の見通し。

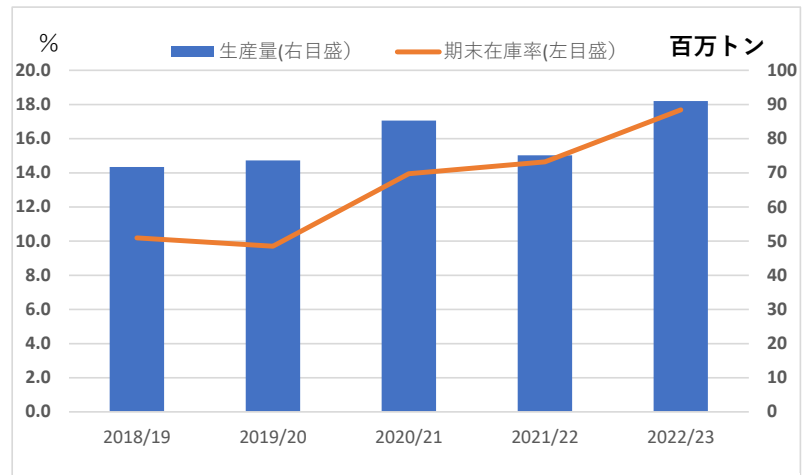
期末在庫量は、544 万トンと前年度より低下、期末在庫率は 4.5%と 2013/14 年度(2.6%)以来の低水準となる見通し。

図 2 ロシアの小麦生産量と期末在庫率の推移

2 ロシア

(1) 穀物生産

ロシア農業省が公表した 9 月 30 日時点の収穫状況は、穀物、油糧種子全体で 1 億 4,000 万トン（クリミアを含む、その他のウクライナの占領地域は含まない）を超えた。そのうち、小麦については、収穫終盤を迎え、1 億トン※を超えたとしている。



出典：米国農務省 「PS&D」(2022. 10)

※注：あくまで品質調整前の数値（バンカーウェイト）のため、実際には数%少ない数量となるとみられる。

これは過去最高の数量であり、USDA の 10 月見通し(以下クリミアを除く)でも小麦の生産見通しは、対前年度比 21%増で史上最高の 9,100 万トンとなる見通し。

とうもろこしについては、現在収穫中であるが、USDA の 10 月見通しでは、1,500 万トンで対前年度比 25%減も、過去 5 年で比較すると 10%増となる見通し。

(2) 穀物輸出

小麦やとうもろこしの穀物輸出税については、7 月以降、ドル建てからルーブル建てとなった結果、ドル換算で割安となり、8 月以降、実質ドル換算では、下落傾向となっている。

USDA によれば、十分な期首在庫と生産量の増加、輸出税の低下に伴い、小麦の輸出量は 4,200 万トンと過去最高になるとみられている。とうもろこしの輸出量は、400 万トン程度となる見通し。小麦の期末在庫率は 17.7%と、前年度末の 14.6%から上昇し、ここ数年間の中でも高水準で推移している。

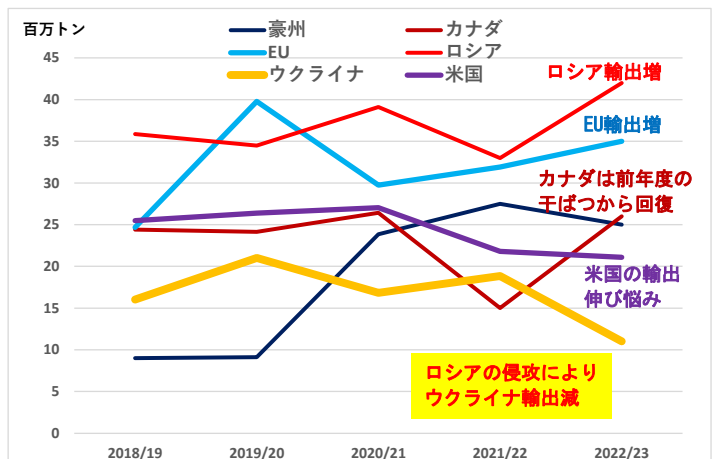
3 今後の世界の穀物貿易への影響

(1) 各品目の状況

小麦については、世界の生産量は前年度を上回る見通しとなっている。主要輸出国では、ロシアの侵攻を受け減産見通し(2,050 万トン：以下 USDA10 月見通し)となっているウクライナを除き、ロシアは史上最高の生産見通し、カナダでは生産量は 3,500 万トンで、干ばつの前年度を大きく上回り、過去 5 年平均を上回る見通し。豪州の生産量は 3 年連続豊作見通しの 3,300 万トンとなっている。インドの輸出規制などの影響は限定的で、米国産は、輸出価格が高いため輸出競争で劣勢となっている。

とうもろこしについては、世界の生産量は前年度を下回る見通しとなっている。主要輸出国では、小麦と同様に、ロシアの侵攻によるウクライナの減産(3,150 万トン)、米国中西部の高温乾燥で減産見通しになっている。輸入国側では、EU が夏季の干ばつにより、対前年比 20% 以上減産(5,620 万トン)となる見通し。今後のウクライナの輸出状況にもよるが、2021/22 年度の冬作が豊作で、史上最高の生産見通しとなっているブラジル産に各国からの需要が集中するとみられる。5 月にブラジル産の輸入について検疫事項で合意した中国の動向が注目される。

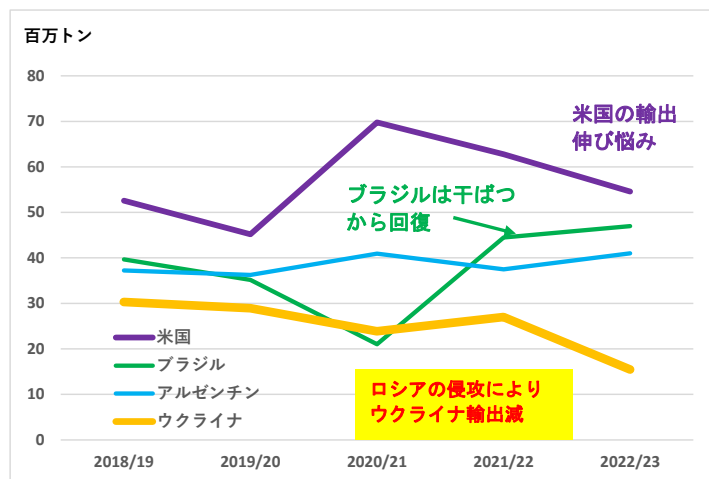
図3 主要小麦輸出国の輸出量の推移



出典：米国農務省 「PS&D」 (2022. 10)

大豆については、米国は減産見通しであるが、世界の生産・貿易動向は、2022/23 年度産の作付けが開始された南米次第である。南米では、現時点では作付面積の増加による大幅な増産(ブラジルで 1 億 5,200 万トンなど)が期待されているが、ラニーニャ現象が継続している中、今後の生育状況が注目される場所である。

図4 主要とうもろこし輸出国の輸出量の推移



出典：米国農務省 「PS&D」 (2022. 10)

(2) ウクライナの輸出をめぐる 4 者合意の延長

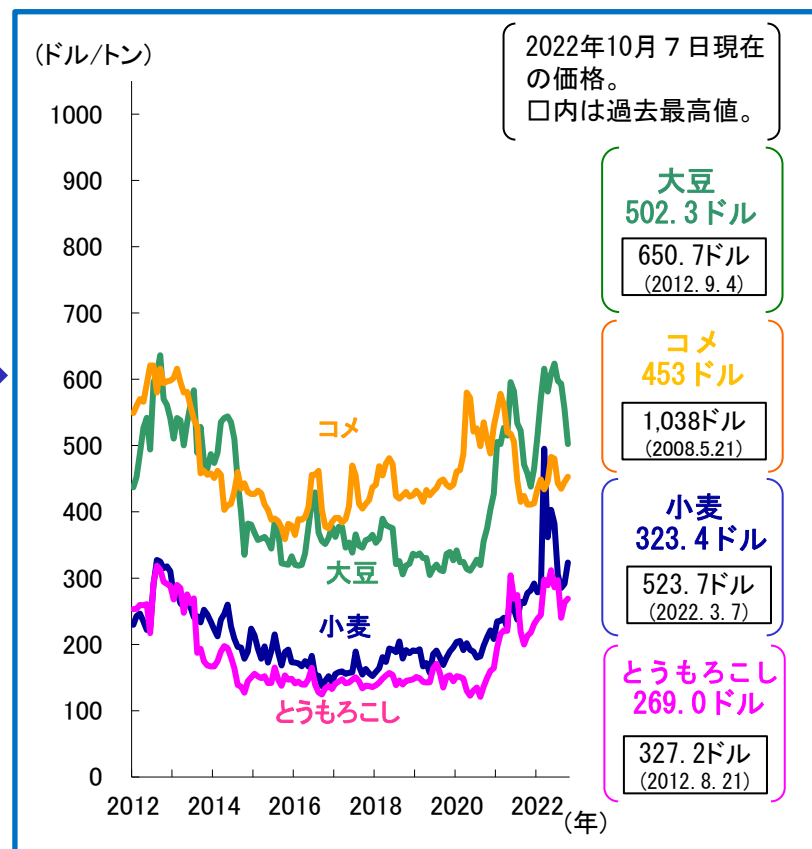
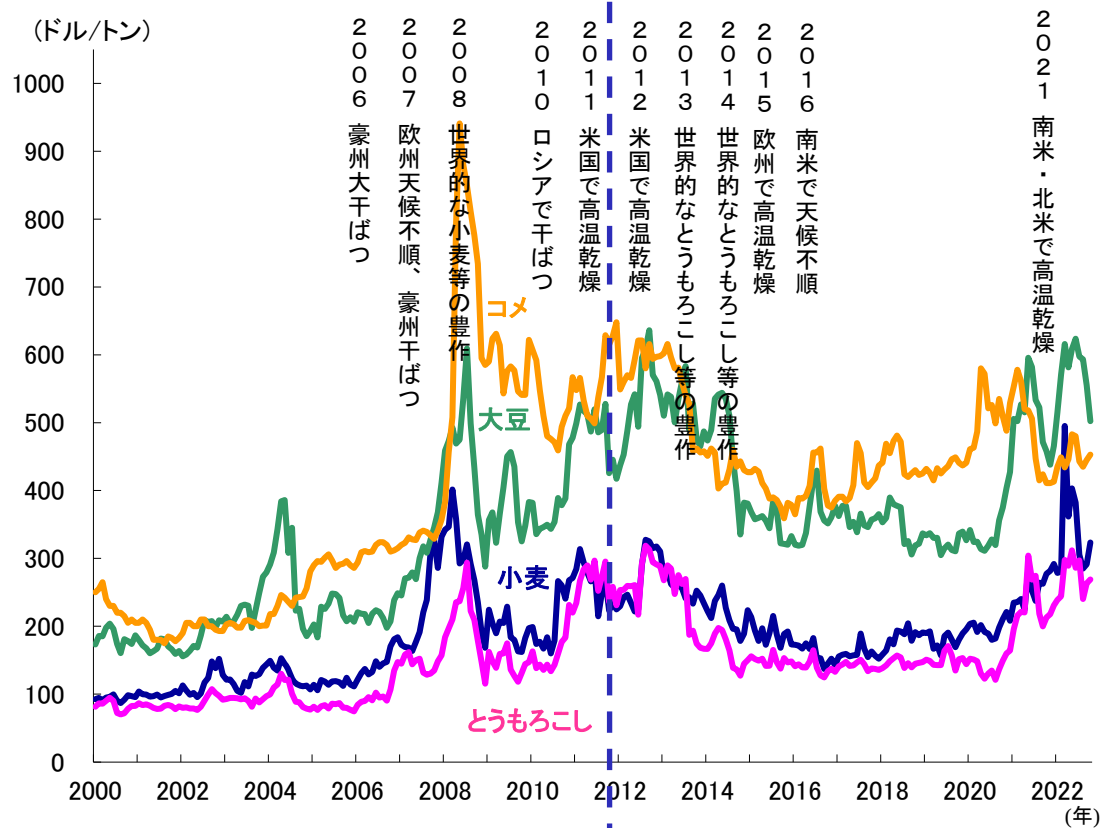
10 月 8 日に、ロシア本土とロシア占領下のクリミア半島を結ぶクリミア橋の爆破事件が起き、その後、ロシア側のウクライナ国内のミサイル等による反撃があり、ウクライナ・ロシアの穀物輸出への影響が懸念されたが、10 月下旬現在、穀物相場に影響を与えらる大きな動きは見られていない。むしろ、小麦や大豆を中心に、ドル高や米国の収穫進展などから 9 月下旬時点と比較して下落している。

一方、現行のウクライナの穀物輸出に関する 4 者合意については、11 月 19 日で合意から 120 日となり、更新時期を迎える。報道等によれば、ウクライナ側はさらなる輸出拡大を求めて、共同調整センターの検査職員の増員や現在のオデーサ港など 3 港に加えミコラエフ港の追加を希望しているが、ロシア側がロシア産穀物や肥料の輸出拡大のため、障害となっている欧米側の経済制裁の緩和等を継続の条件としているといわれており、引き続きウクライナ情勢に注視が必要。

資料 1 穀物等の国際価格の動向（ドル/トン）

- とうもろこし、大豆が史上最高値を記録した2012年以降、世界的な豊作等から穀物等価格は低下。2017年以降ほぼ横ばいで推移も、2020年後半から南米の乾燥、中国の輸入需要の増加、2021年の北米の北部の高温乾燥等により上昇。2022年に入り、ウクライナ情勢が緊迫化する中、小麦は史上最高値を更新。コメは、2013年以降低下も2020年ベトナムの輸出枠設定や2021年初頭のコンテナ不足等で一時的に上昇。2021年2月半ばから海外需要低迷で低下。
- 穀物等価格は、新興国の畜産物消費の増加を背景とした堅調な需要やエネルギー向け需要により、2008年以前を上回る水準で推移している。

□ 穀物等の国際価格の動向



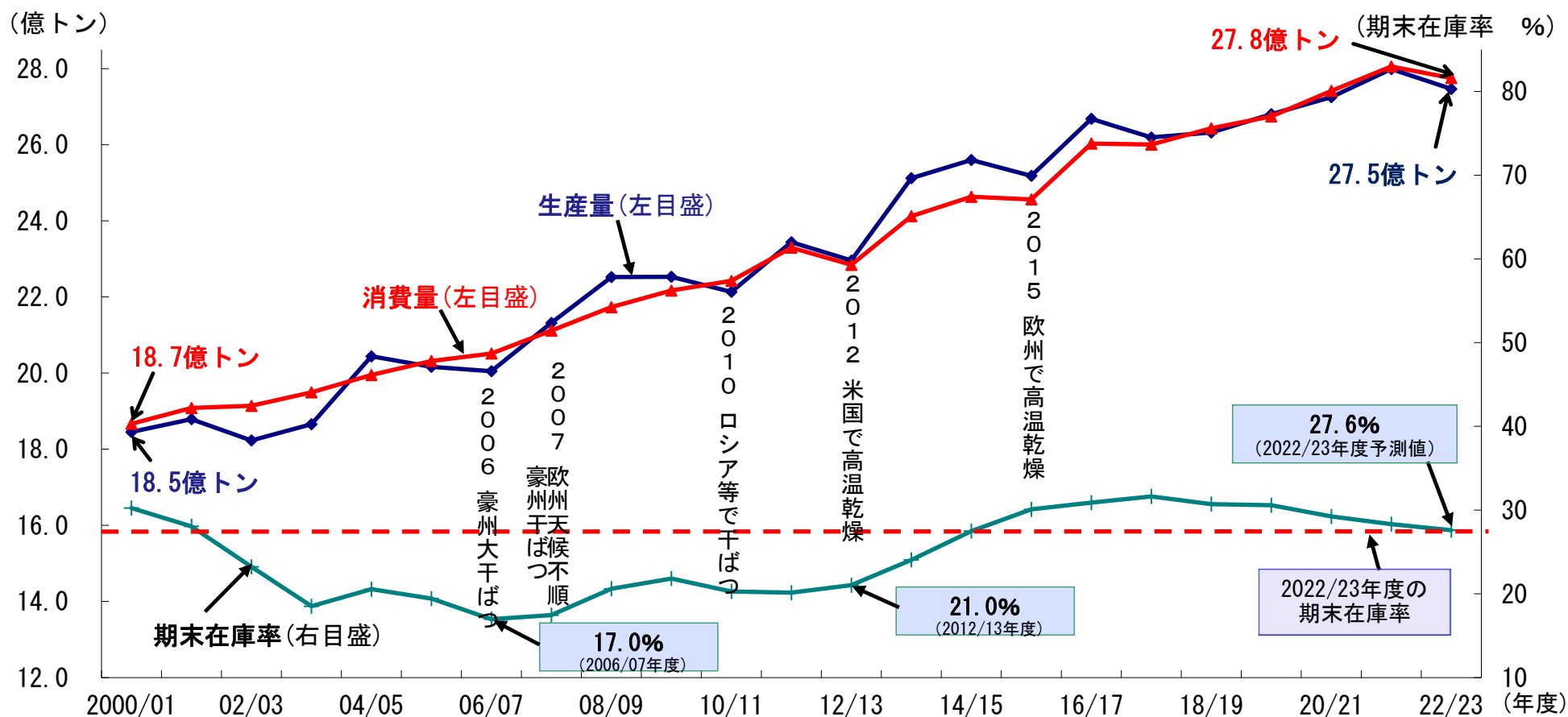
注1：小麦、とうもろこし、大豆は、シカゴ商品取引所の各月第1金曜日の期近終値の価格（セツルメント）である。コメは、タイ国家貿易取引委員会公表による各月第1水曜日のタイうるち精米100%2等のFOB価格である。

注2：過去最高価格については、コメはタイ国家貿易取引委員会の公表する価格の最高価格、コメ以外はシカゴ商品取引所の全ての取引日における期近終値の最高価格。

資料2 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移

- 世界の穀物消費量は、途上国の人口増、所得水準の向上等に伴い増加傾向で推移。2022/23年度は、2000/01年度に比べ1.5倍の水準に増加。一方、生産量は、主に単収の伸びにより消費量の増加に対応している。
- 2022/23年度の期末在庫率は、生産量が消費量を下回り、前年度より低下し、27.6%。直近の価格高騰年の2012/13年度(21.0%)を上回る見込み。

□ 穀物(コメ、とうもろこし、小麦、大麦等)の需給の推移

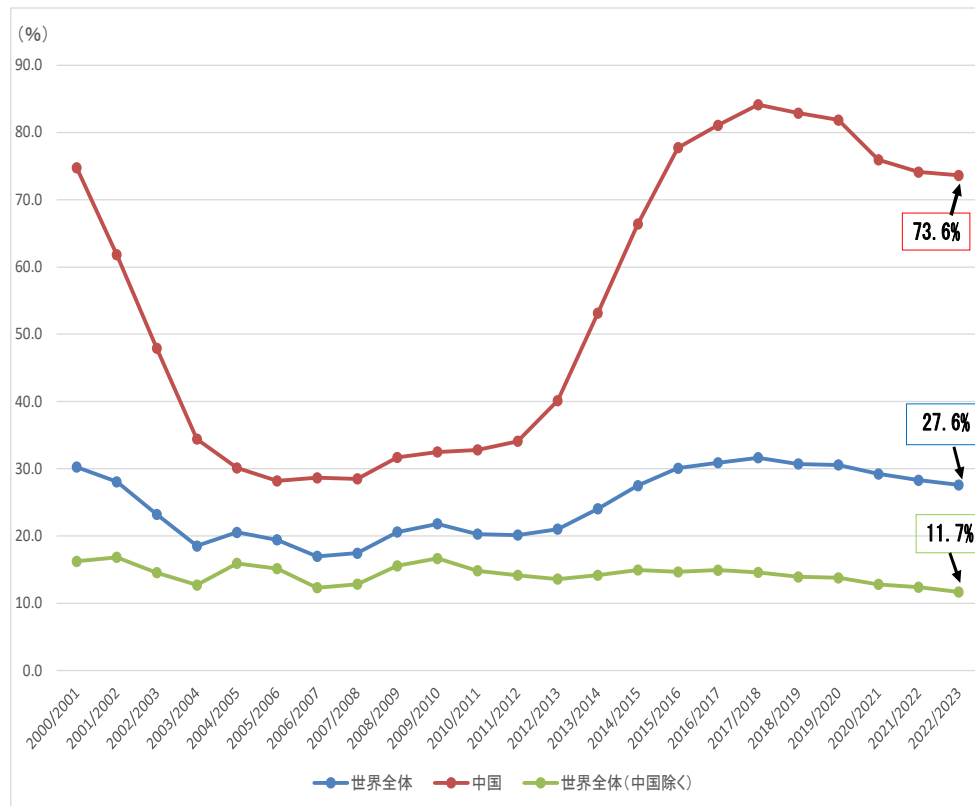


資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(October 2022)、「PS&D」

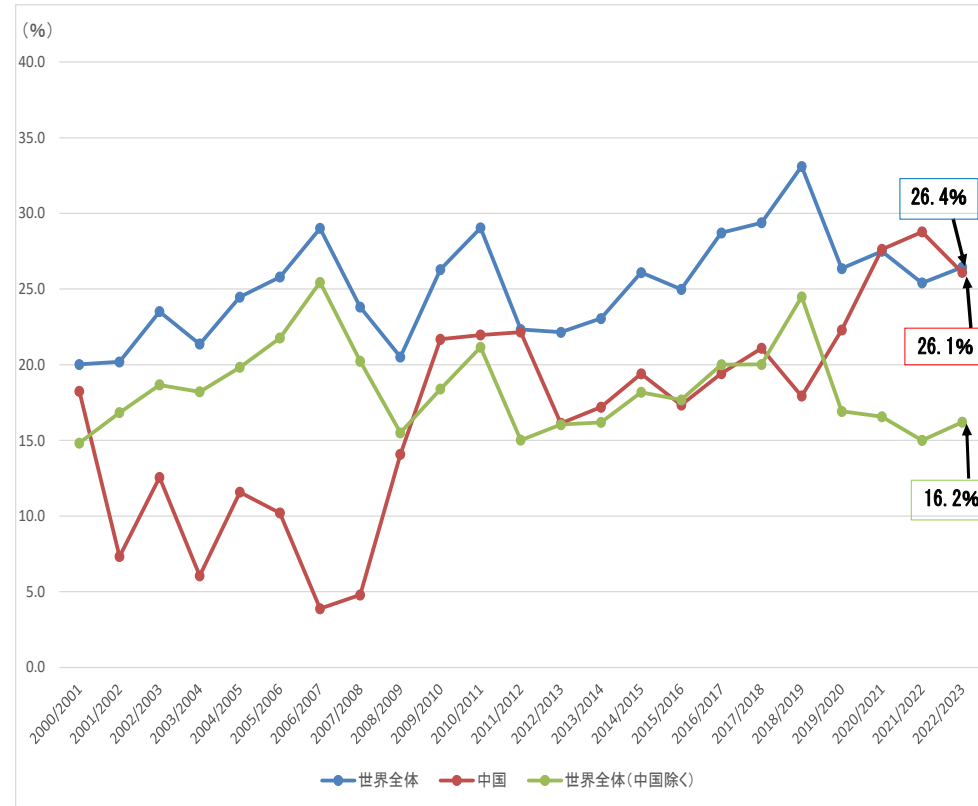
(注) なお、「PS&D」については、最新の公表データを使用している。

資料 3-1 穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、大豆）

○ 穀物全体の期末在庫率の推移



○ 大豆の期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(October 12, 2022)

注: 1) 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等(大豆除く)。

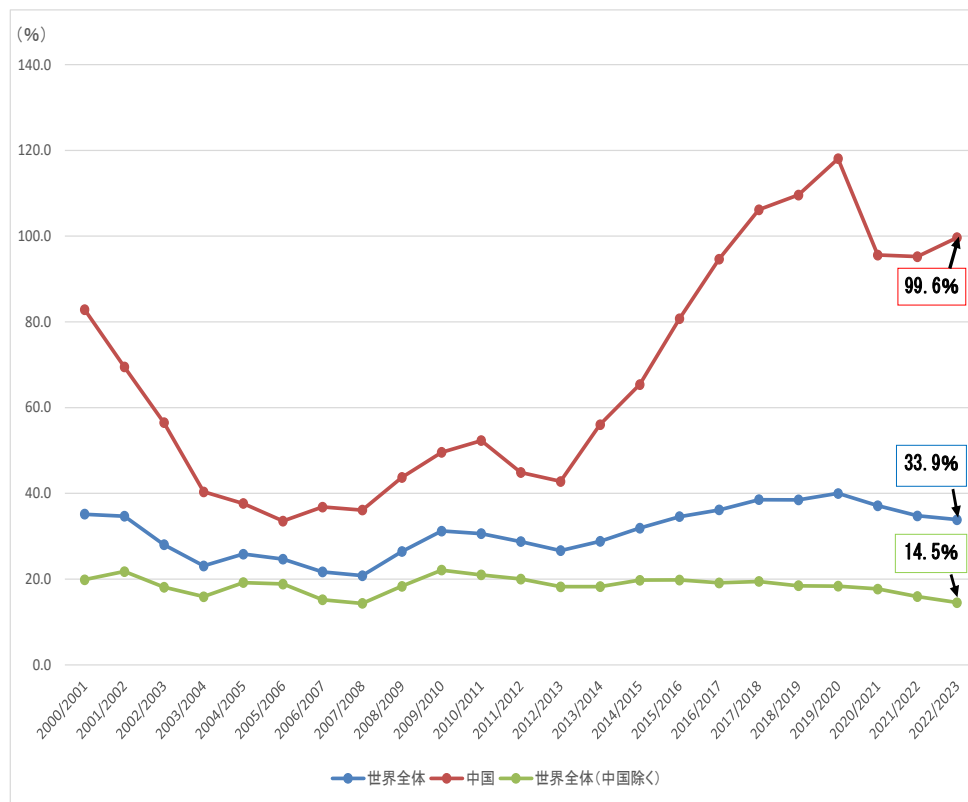
2) 世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / (消費量 + 輸出量 - 輸入量) × 100 ※ただし大豆については、世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / 消費量 × 100

3) 中国の期末在庫率(%) = 中国の期末在庫量 / (中国の消費量 + 中国の輸出量) × 100

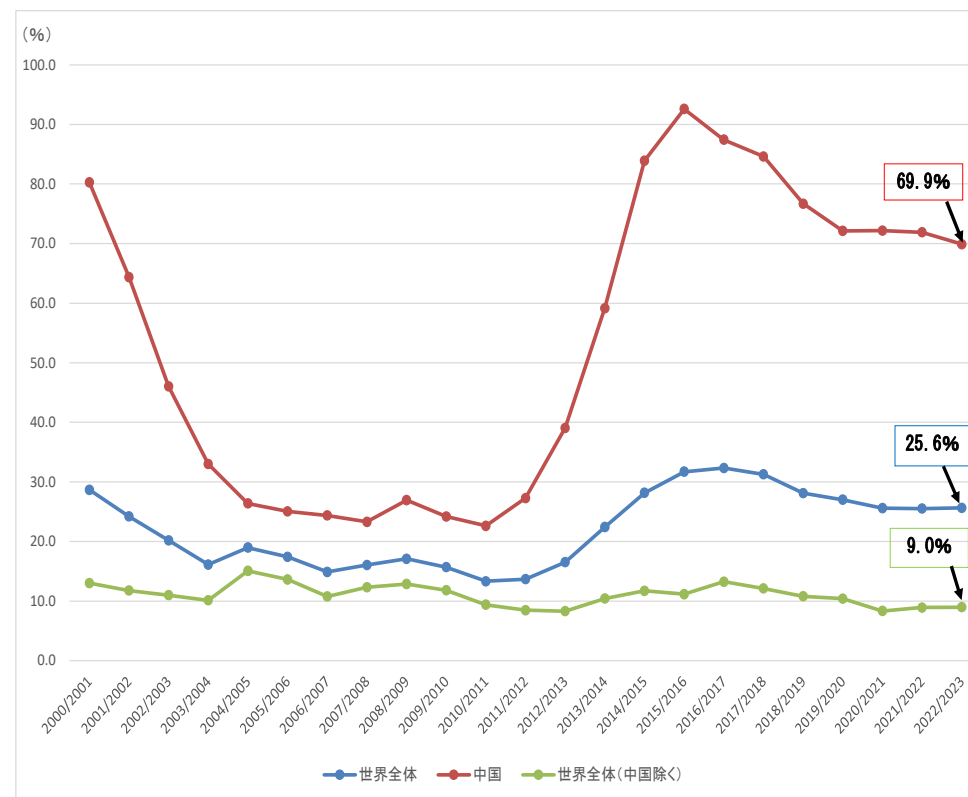
4) 中国除く期末在庫率(%) = 中国除く期末在庫量 / (中国除く消費量 + 中国除く輸出量) × 100

資料 3-2 穀物等の期末在庫率の推移（小麦、とうもろこし）

○ 小麦の期末在庫率の推移



○ とうもろこしの期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(October 12, 2022)

注: 1)小麦は、小麦及び小麦粉(小麦換算)の計。

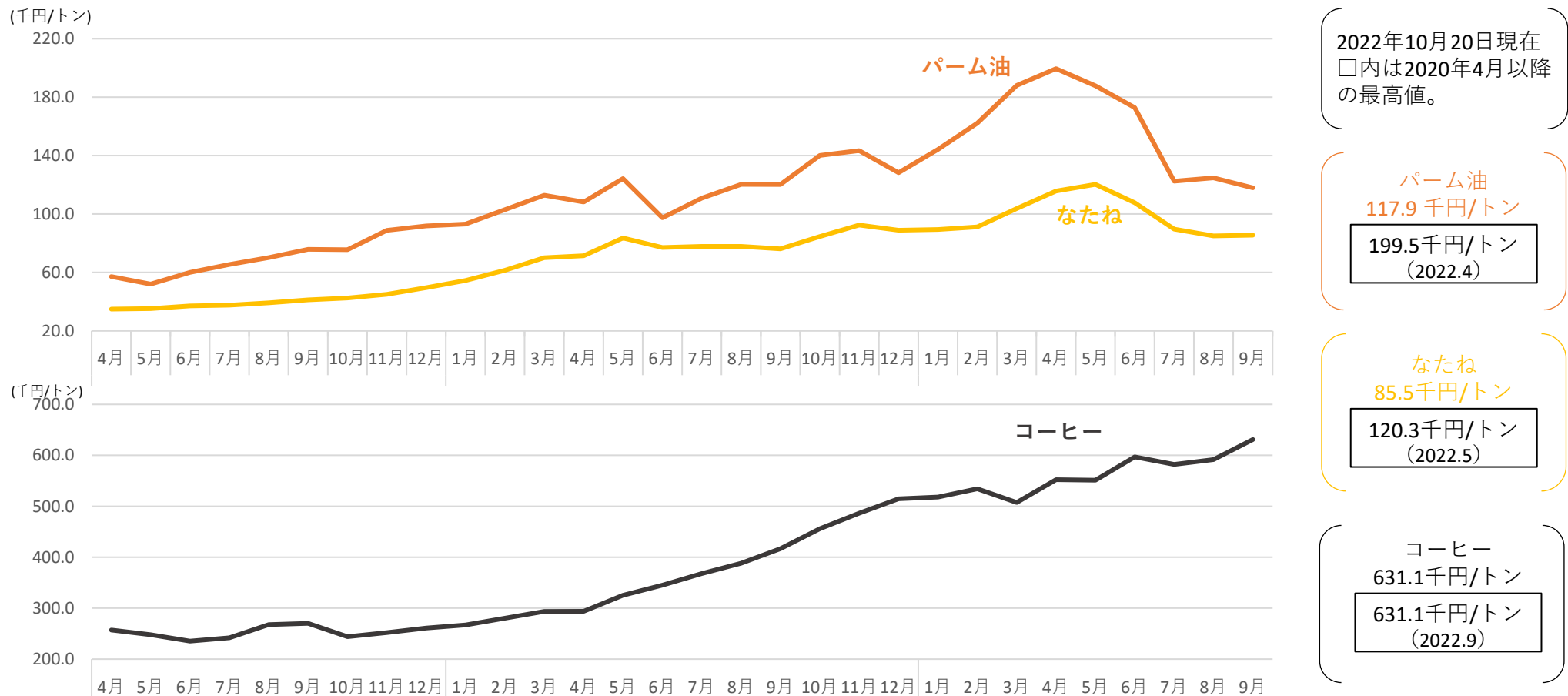
2)世界の期末在庫率(%)=期末在庫量/(消費量+輸出量-輸入量)×100

3)中国の期末在庫率(%)=中国の期末在庫量/(中国の消費量+中国の輸出量)×100

4)中国除く期末在庫率(%)=中国除く期末在庫量/(中国除く消費量+中国除く輸出量)×100

資料４－１ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の動向

- なたね、パーム油について、需要の面では世界的な人口増加や中国等における所得水準の向上による食用油需要の拡大、エネルギー向け需要の増加、ウクライナ情勢の影響などが価格に影響を及ぼしている。
- 供給面では、なたねについて、主産地であるカナダで減産があったものの、作付・生育状況が良好であり、平年並みの収量が見込まれている。パーム油については、インドネシアの輸出禁止措置の解除（5月23日）やマレーシアの生産量の増加予測が価格に影響を及ぼしている。
- コーヒーについて、世界最大の生産国であるブラジルの天候不順や世界的な物流の混乱等供給不足への懸念が強まったこと、需要面ではワクチン接種による経済活動の回復からコーヒー消費量が増加したことが価格に影響を及ぼしている。

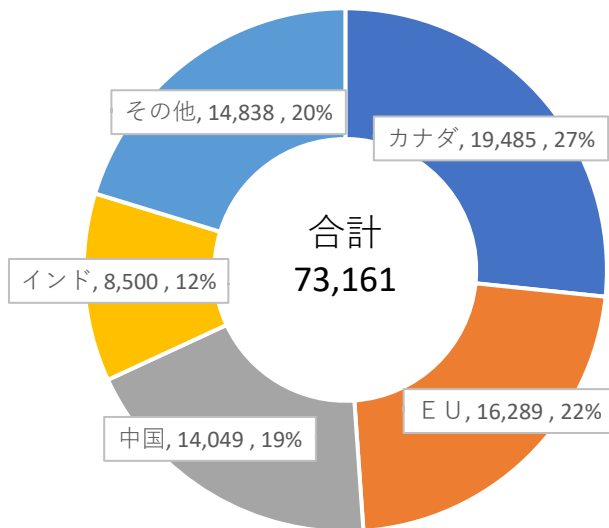


※ なたねの国際価格についてはカナダウィネベグ菜種市場の先物価格（期近物）を、パーム油の国際価格についてはマレーシアパーム油市場の先物価格（期近物）を、コーヒーの国際価格については国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均を用い、為替レートから円に換算して算出。

資料４－２ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の生産量及び輸入先

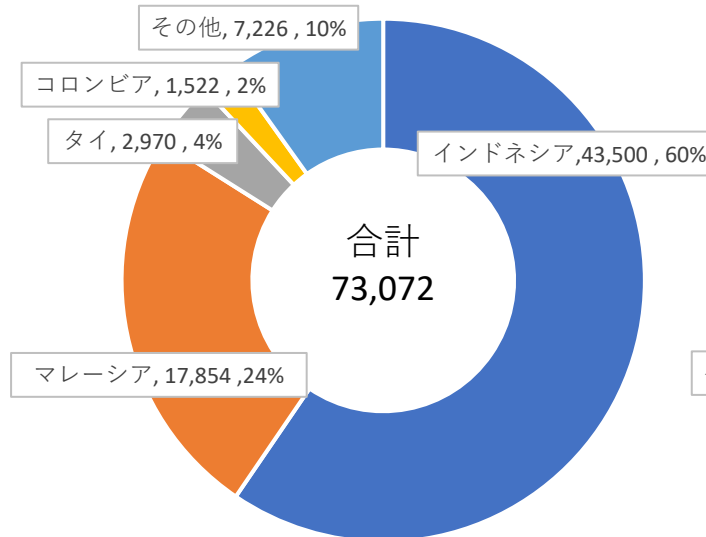
○主要生産国の生産状況

なたね生産量（2020/21）
（単位：千トン）



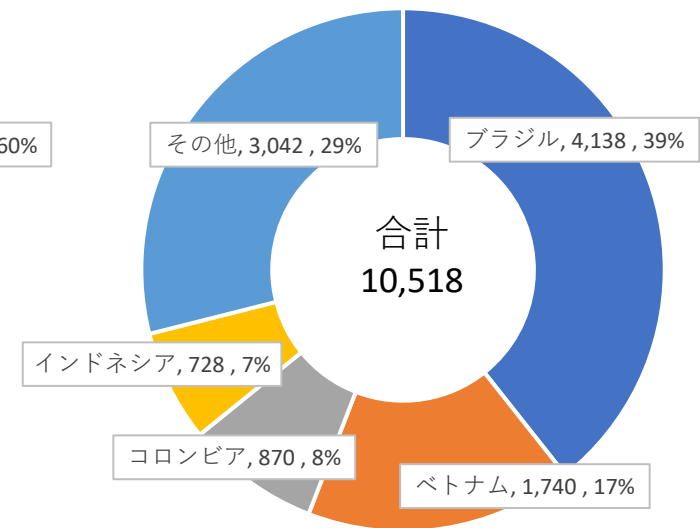
※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）

パーム油生産量（2020/21）
（単位：千トン）



※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）

コーヒー生産量（2020）
（単位：千トン）



※国際コーヒー機関（ICO）統計資料

○我が国の主な輸入先の状況（単位：千トン（2021年））

なたね	輸入量	割合
カナダ	2,124	90.7%
オーストラリア	218	9.3%
その他	0	0.0%
合計	2,342	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1205）

パーム油	輸入量	割合
マレーシア	418	65.4%
インドネシア	220	34.5%
その他	0	0.0%
合計	638	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1511）

コーヒー	輸入量	割合
ブラジル	146	35.7%
ベトナム	101	24.6%
コロンビア	48	11.7%
その他	115	28.0%
合計	399	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：0901.11-22）

資料４－３ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移①

①なたね

単位（千円/トン）

	2020年									2021年												2022年								
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
なたね	34.9	35.2	37.1	37.6	39.2	41.2	42.5	45.0	49.5	54.4	61.5	70.0	71.4	83.6	77.0	77.8	77.9	76.2	84.5	92.4	88.8	89.4	91.2	103.7	115.7	120.3	107.7	89.6	85.0	85.5
前月比	99.7	100.9	105.4	101.4	104.2	105.1	103.0	106.1	110.0	109.9	113.0	113.9	101.9	117.1	92.2	101.1	100.0	97.8	111.0	109.3	96.2	100.6	102.0	113.8	111.5	104.0	89.5	83.3	94.8	100.6
前年同月比	92.1	98.4	101.8	102.0	109.7	112.6	112.3	119.6	128.9	136.4	162.7	200.1	204.6	237.4	207.6	206.9	198.5	184.9	199.2	205.2	179.3	164.3	148.3	148.1	162.0	143.9	139.8	115.1	109.1	112.3

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 カナダウィニペグなたね定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

②パーム油

単位（千円/トン）

	2020年									2021年												2022年								
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
パーム油	57.1	52.1	60.0	65.4	70.1	75.8	75.5	88.8	91.8	93.1	102.9	112.9	108.2	124.2	97.4	110.8	120.3	120.1	140.1	143.4	128.2	144.2	162.2	188.0	199.5	187.8	172.8	122.4	124.7	117.9
前月比	102.1	91.1	115.3	109.0	107.2	108.1	99.6	117.6	103.4	101.4	110.6	109.7	95.9	114.8	78.4	113.8	108.5	99.9	116.6	102.3	89.4	112.5	112.4	115.9	106.1	94.1	92.0	70.9	101.9	94.5
前年同月比	100.0	98.9	115.0	129.8	129.3	131.9	135.9	134.6	121.7	117.0	143.8	201.8	189.4	238.6	162.3	169.4	171.5	158.4	185.5	161.5	139.7	155.0	157.5	166.6	184.4	151.2	177.3	110.5	103.7	98.1

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 マレーシアパーム油定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

資料４－４ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移②

③ コーヒー

単位（千円/トン）

	2020年									2021年												2022年								
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
コー ヒー	257.1	247.9	235.5	241.8	267.7	270.0	244.0	251.9	260.9	266.8	280.2	293.5	293.7	325.2	345.1	367.9	388.1	416.7	455.9	486.3	514.7	517.9	534.1	507.5	552.1	551.2	596.8	582.3	591.6	631.1
前月比	99.5	96.4	95.0	102.7	110.7	100.9	90.4	103.3	103.6	102.3	105.0	104.7	100.1	110.7	106.1	106.6	105.5	107.4	109.4	106.7	105.8	100.6	103.1	95.0	108.8	99.8	108.3	97.6	101.6	106.7
前年同 月比	111.0	111.4	99.1	98.0	119.0	116.0	105.3	97.4	92.9	104.6	115.4	113.6	114.2	131.2	146.6	152.2	145.0	154.3	186.9	193.0	197.3	194.1	190.6	172.9	188.0	169.5	172.9	158.3	152.4	151.4

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均から算出

2 ICO複合指標価格は、米国、ドイツ、フランスの3大市場の現物の成約価格を収集しICOの定める方法で4品種ごとの加重平均値を算出したもの。

資料5 食品小売価格の動向

○ 令和4年9月の国内の加工食品の消費者物価指数は98.7～156.8（前年同月比で－1.3%～37.6%）の範囲内。

消費者物価指数（総務省） （令和4年4月～令和4年9月）

	H29	H30	H31 (R元)	R2	R3	R4						
品目	平均	平均	平均	平均	平均	4月	5月	6月	7月	8月	9月	上昇率 (前年 同月比)
食パン	99.6	100.2	101.1	100.0	99.2	108.0	107.5	107.9	111.9	114.4	113.8	14.6%
即席めん	95.7	95.3	98.5	100.0	100.1	100.1	100.1	110.0	113.7	114.9	112.4	12.8%
豆腐	98.6	98.8	99.1	100.0	101.3	103.1	104.0	104.7	104.9	105.1	106.7	5.0%
食用油 (キャノーラ油)	102.7	101.5	100.9	100.0	106.9	134.8	135.4	139.2	145.8	150.4	156.8	37.6%
みそ	96.9	97.4	99.1	100.0	99.3	100.7	101.0	99.8	99.9	100.1	103.4	3.4%
マヨネーズ	102.3	100.8	100.7	100.0	105.6	123.9	126.1	125.0	125.2	126.5	127.0	14.2%
チーズ	97.3	100.9	101.3	100.0	98.7	103.0	105.3	104.0	106.2	106.6	113.2	12.5%
バター	99.3	99.5	99.9	100.0	99.9	99.1	99.5	99.3	99.1	99.4	98.7	－1.3%
生鮮食品を 除く食料	97.0	97.9	99.0	100.0	100.2	102.4	102.6	103.2	103.8	104.2	105.0	4.6%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

【参考】

食品価格動向調査（農林水産省） （令和4年4月～令和4年10月）

	H29	H30	H31 (R元)	R2	R3	R4								
品目	平均	平均	平均	平均	平均	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	上昇率 (前月比)	上昇率 (前年 同月比)
食パン	97.6	97.9	101.3	100.0	98.6	105.1	104.6	105.9	109.8	111.1	110.7	110.9	0.2%	12.5%
即席めん	92.6	92.4	97.9	100.0	99.2	99.0	99.0	110.0	111.2	111.2	110.0	110.0	0.0%	11.1%
豆腐	100.8	100.1	100.9	100.0	100.6	101.6	102.4	102.9	103.3	103.7	104.2	107.2	2.9%	6.5%
食用油 (キャノーラ油)	97.9	97.9	103.5	100.0	104.1	129.6	130.8	132.7	139.1	148.3	156.8	160.6	2.4%	42.4%
みそ	91.9	96.6	100.4	100.0	99.2	99.0	99.6	98.8	99.8	100.4	101.7	102.5	0.8%	4.2%
マヨネーズ	99.1	97.9	103.1	100.0	102.2	117.2	117.2	118.3	117.2	118.3	116.9	126.2	8.0%	18.4%
チーズ	95.2	98.6	100.9	100.0	98.1	105.0	104.5	105.0	105.0	104.5	108.0	114.4	5.9%	16.0%
バター	98.8	99.0	99.5	100.0	99.8	99.3	99.3	99.3	99.0	99.3	98.6	98.6	0.0%	-1.3%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

注2: 調査は原則、各都道府県10店舗で実施。平成30年9月までは週1回、同年10月以降は月1回実施。

注3: 調査結果は調査期間中の平均値で算出。

注4: 令和2年4～5月、令和3年1～3月、同5～9月については、新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言の対象都道府県においては調査を中止。そのためそれぞれ前月の値とは接続しない。

資料 6-1 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

○独立行政法人農畜産業振興機構（ALIC）は毎月25日頃に海外の畜産物の需給動向を公表（月報 畜産の情報）

○2022年11月号（10月25日に公表）の各品目の主な動きは以下の通り

『月報 畜産の情報』

◆牛肉

（米国）干ばつによりと畜頭数は増加

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002432.html

（豪州）ラニーニャ現象により肉牛取引価格は上昇傾向が継続

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002433.html

（ウルグアイ）22年の牛肉輸出量、堅調な需要を背景に増加傾向で推移

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002434.html

◆豚肉

（カナダ）豚総飼養頭数、4年ぶりに減少

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002442.html

（EU）22年上半期の豚肉生産量は前年同期比で4.2%減

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002443.html

◆鶏肉

（タイ）22年に入り鶏肉価格は引き続き高値で推移

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002444.html

資料 6-2 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

◆牛乳・乳製品

（米国）乳牛飼養頭数は増加傾向も、大幅増は見込めず

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002435.html

（EU）生乳取引価格は18カ月連続で前年同月を上回る

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002445.html

（NZ）生乳生産量は低迷も、乳製品輸出量は堅調に推移

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002446.html

（中国）主要乳製品輸入量の減少傾向続く

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002447.html

◆飼料穀物

（世界）22/23年度の世界のトウモロコシ、期末在庫は前年度から微減の見込み

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002436.html

（世界）世界の大豆生産は前年増も、米国での減産見込で期末在庫は1億トン台割れ

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002448.html

（米国）22/23年度の米国トウモロコシ、在庫率は8%台まで低下

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002449.html

（ブラジル）21/22年度トウモロコシ生産量、第2期作を中心に大幅増の見込み

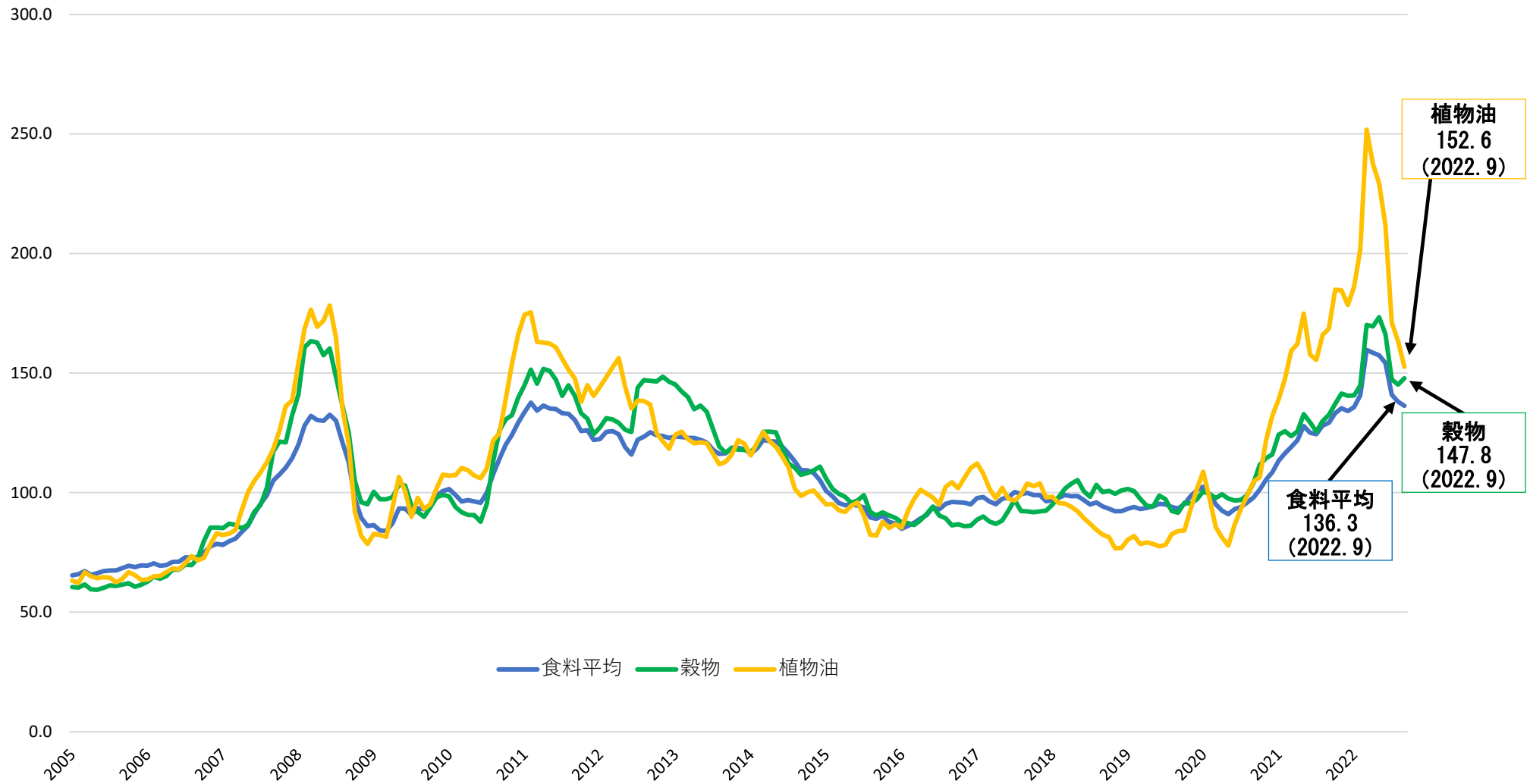
https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002461.html

（中国）トウモロコシおよび大豆の価格動向

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002450.html

資料 7 FAO食料価格指数

(2014-16平均=100)



資料: FAO「Food Price Index」(2022.10)より作成

注: 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等、植物油は大豆油、菜種油、ひまわり油、パーム油等